

地域に伝わる伝説や民話、文化財などを紹介

にしあいづ物語100選 その98

一騒動を引き起こした「日露戦役記念碑」

文：田崎 敬修

越後街道三大宿場町の1つとして繁栄した野沢の町並みと尾野本の田園を眼下に見下ろし、飯豊連峰の雄大な山並みを遠望できるのが雷山公園です。

この雷山公園に今では福島県指定重要文化財の「杉木之覚碑」^{すぎのきのおぼえひ}などさまざまな石碑がありますが、中でもひときわ目を引くのが「日露戦役記念碑 元帥侯爵山縣有朋書」^{げんすいこうしゃくやまがたありともしよ}という大型の堂々たる石碑です。この石碑をめぐる一騒動がありました。

この発端は明治38年(1905)10月、野沢村^{まさなかむら}と正中村^{せりこしくさむら}・芹越草村^{せりこしくさむら}からなる野沢村外二ヶ村組合の村長に齋藤兵鬼千^{さいとうへいきち}が選ばれました。これまでは県からの押し付け村長でしたが、今回は久しぶりに地元村民に選ばれた村長ということになります。その齋藤村長が雷山を公園にして、そこに日露戦役記念碑を建てようと計画したのです。村長に当選するちょうど2ヶ月前に日本がロシアに勝った日露戦争の講和会議があり日本中が戦勝ムードに満ちあふれていました。

齋藤村長は日露戦争に二等軍医正(中佐)として従軍していた野沢出身の渡部鼎^{かなえ}(研幾堂塾長の渡部思齋の息子で野口英世の手術をした医者)に碑文を筆で書く揮毫^{きごう}を誰にするか頼んだのでしよう。鼎は日露戦争の参謀総長であった山縣有朋^{やまがたありとも}に碑文を書いてもらい、村に送りました。

ところが村議会では、会津戦争の時、会津征討軍参謀で越後口征討軍の実質総司令官であった山縣有朋が、賊国であった会津のしかも一小村に筆をとるはずがないだろうから、この書は偽物なのではないかと騒ぎになりました。このことが耳に入った鼎は憤慨し、山縣の「真筆」であるとの添え書きとともに「村長と議長は上京して、閣下にお詫びせよ」という手紙を送ります。『西会津町史 第5巻(上)』の「明治39年『日露戦役記念碑』揮毫者山縣有朋への感謝文」には、戦没者への弔意とともに山縣有朋に最大級の謝辞が述べられ、文末には村長・小学校長(2人)・訓導(小学校教員)・助役・収入役・村会議員(11人)・神職・住職(2人)・愛国婦人会幹事(2人)・有志者(16人)の氏名が記されています。

実際に上京してお詫びをしたのか、この感謝文を送ってお詫びに替えたのかどうかは不明ですが、明治39年(1906)4月28日、齋藤村長は雷山を公園にして、この感謝文を述べ、「日露戦役記念碑 元帥侯爵山縣有朋書」の戦勝記念石碑の盛大な除幕式を挙行したのでした。

翌40年(1907)7月1日、野沢村が野沢町になると齋藤兵鬼千は初代野沢町長となりました。



▲日露戦役記念碑

今月の表紙

今月の表紙は、9月28日に行われた、こゆりこども園の運動会から。園児たちが一生懸命に頑張る姿と、会場のワクワクした雰囲気がとても印象的でした。

編集後記

先日、さゆり公園のふれあい広場に取材に行った時のこと。広場の片隅に、とてもキレイに咲いているコスモス畑を見つけました。今年の春から広報担当となりカメラを持つことが多くなったことで、今まで何気なく見ていた季節の風景や植物に、より引きつけられるようになった今日この頃です。(三留)

